

## 第52回うとう会に集いて・・・

26.03.15 52回うとう会参加者有志

昨年10月の異常気象による台風集中等のため中止した52回うとう会を、今年3月中旬に無事延期開催することができ、参加者一同安堵しております。

当会もご多分にもれず高齢化が進み、発足当時のメンバーは富岡氏唯一人となりましたが、米寿となっても現役で謡や仕舞の指導をされ、会員の大きな目標となっております。

懇親会の席で、それぞれの『謡曲への想い』を話し合ったが、異口同音に謡曲愛好者の高齢化とそれに伴う減少であり、伝統芸能『能楽』の衰退への心配でした。

能楽は室町時代から650年以上続く伝統芸能ですが、明治までの500年間は武家の式楽として厚遇されており、明治から終戦までは国粹主義的な世相もあって、日本の伝統文化の中核として、指導層や一般人の教養として受け入れられていた。

戦後は官庁や民間企業の厚生福祉としてのクラブ活動で、謡曲や仕舞の稽古が盛んになり、観世100万人とも言われ、我々もその時代に習い始めました。

21世紀になって企業のグローバル化が進み、企業のクラブ活動費も削減され、若者の趣味・趣向の多様化により、若年愛好者の減少と高齢化が著しく進行しています。

此の事により、この世界で活動しているプロの能楽師の、生活の基盤を脅かす事態となりかねませんし、能楽発祥以来延々と受け継がれている家元制度が、危機に瀕することにもなります。

新聞等によると観世宗家・清河寿氏は、歌舞伎との連携も検討しているようですが、これも危機感の表れかとも思われます。

それらを解決するため、以下の提言を行います。

- 1) 今一番重要な事は、能楽をもっと身近な芸能にすることです。それにはもっと数多くテレビ等で『能』を見せ、小学・中学生を含む若者向けに易しく解説すること。
- 2) 全国の能楽堂に、若者・外人向けに格安席・日を設定、『本物の能』を見せること。  
(上演の前後にボランティアによる説明会等を実施する)
- 3) 小学・中学生に伝統文化として、能楽・歌舞伎等の学習を義務付け、年一回程度は講堂等で実演を見せること。

我々高齢の謡曲愛好者は、永年の鍛練による心肺機能の強化で、元氣な老後を有意義に過ごし、『謡曲十徳』を存分に楽しみたいと思っています。

以上